

卒業生だより

生活の窓から

作陽短期大学 赤 沢 光 子*

「ジー、ジー」と今しも授業開始のベルが味気なく鳴響いて来る。今日一日、このブザーの音に支配され、肌寒き勤務の一日がつづけられていくのである。

ここ岡山県の北部に位置する城下町、津山市にある小さな地方短期大学に迎えられ、浅学非才をかえりみず若い意気と希望に燃え赴任して既に5ヶ月余日。この間、無我夢中にその日その日をようやく抵抗するのが精一杯の明暮れを送つて来ましたが、今新たに過ぎし15ヶ月余の日々を振り返つてみますとき、只一つきらめくのは恐怖の念あるのみです。どちらをむいても未知の人々の中に混り話し相手、相談相手もなくこの学生気分を抜切らぬ私を一教官として取扱われる心苦しき。しかし、いつまでも甘い学生気分を脱皮することは出来ないのであろうか、それを把持しつつ、或時は苦しみ、或時はほほえみながら私に与えられた職務に忠実に服従していかなければならないのである。現在、私の担当科目は短大において調理々論、調理実習、家庭管理学とそれに附随する高校3年の食物—これは現在のポジションを確固とする為のものとして進学クラスの2組を担当—。以下、私の卒業後の生活の一片を記してみましよう。

楽しい学生生活の最後のページを飾るものとして工藤教授の御指導を仰ぎ「牛角の炭水化物の研究」と取組んで1年。卒業論文が如何なるものか、どの様に進めて行けばよいか等がやつと判明しかけたときは既に論文提出も眼前に切迫した日のこと。どうにか学窓を巣立つて(こう記すと1人で余裕しやくしやくと巣立つたようだが、何のその御多聞にもれず色々諸先生の御手数をわずらわしたものでトコロ天式に出していただいたのだが—)中原先生、郡先生の御指導を仰ぐべく調理研究室にお世話いただくこととなり、学生生活の連続を母校で送りむかえさせていただいたのも束の間、運命のいたづらには如何に抵抗することも

出来ず、僅に半ケ年という短期間にて帰郷—フランソワ・ラブレー白く「運命は従うものを潮にのせ、抗うものをひいて行く」と。

懐しい故郷の山野の中での生活は学校勤務生活の日々であります、僅に1ヶ年余の親もとを離れ未知の世界に飛立っている若鷄は、見るもの、聞くものすべてこと新しく、何を含むがしれない波にのつて行かなければならないのだ。或時は荒狂う大波であつたり、或時は美しいメロディーをのせた小波であつたり—。危険を危険とも存知しないで。学窓を離れてはじめて教壇にたつた危つかしさ。職場では同年の人々に恵まれず教職年数〇〇年といわれる先生方の中に只1人、若配者の存在はすべての面にわたり心淋しさを感じ、開くページの内容も頭の中には残らず「早くこの生活の中にとけこまなければ」と思う己の心に反比例し冷い暗い生活の日々と孤独をいやという程味わいながら過ぎていったものだ。勿論、人間は本質的には孤独に耐えねばならぬ時はしばしば存在し、それがあつたり、以下のものであつたり、以下のものであつたりすることは百も千も承知ではあつたが、現実においてどんなに己を孤独に感じたことか。「たつた一人」を机にむかつて十分に味合い流涙にむせび、立腹したことも幾度か—。職場の空気に1日も早くとけこまねばと努力することに懸命であつたあの日。最年少者、教職未経験の私は、或時はお茶吸みを、そして或時は何か用事が出来れば真先に機転をさかして動じなければならぬのであつた。

若い私にとっては如何なる職場においても「気軽さ」という表現法は常に欲求されるものであつた。この様に記せば未経験の私といえど同じ職場において対等の立場で臨むべきだ云々と申されるでしょうが、今日の社会制度の中において、自由平等がさげばれながらも本来のそれらの意味を解する時、私のおかれたポジションにおいて私の行つて来た一つ一つは誤りではなく必ずや必要性を欲求され皆様方が職場につかれた

* 昭和31年本学卒業生

時、あるいは他家の人となられた時十二分にお気づきになることと存じます。しかし、ここで私が短い経験を通して申しておきたいことは孤独を味合いながらも弱気のみ支配されることなく、元気も出してすべてのことどもにたえる若さを見出し再出発する意欲を持つて欲しいことです。一つ記しておきたいことは、如何なる職場においても同じことですが、好感の抱ける人と非常に根性の悪いと感じられる人々も存在するでしょうが、人々に接するに先入観を把持することなく明るい、おおらかな気持で接すれば必ずや、それらの人々は己の身近に明るさをもたらしてくれるでありましょう。決して人々に意地悪く接したり、行動することなく耐えるものを把持しておれば、その人々をあわれむ何物かが自然に己の内に芽生えてくるでしょう。ここまで到達すればそれだけ己の何物かが向上したわけですね。これは若い私の一番悩んだ点であり、思師から色々とお教を乞つたものです。そして職場に若さと新しさが如何に必要とされようが、我が意のままその環境の中に己よがりのものを導入して行くことは許されず、未経験者においては古の言葉を引用すれば、郷に入りては郷に従えの如く一応その空気になじみ、その中から若さを新しさを見出して欲しいのです。何事も解せない私ではありますが、善は善、悪は悪と若さに溢れる新しい一面を見出すことだけは忘れず、学生の皆様方とのギャップを出来るだけ

短いものにしようと努力しているのです。

私の臨む職場においては、すべて私が最年者であり（勿論、卒業後間もないのだから無然のことだが—）あらゆる面において困惑を感じるのですが、今日まで奥深い山間の大川にかけられた一本の丸木橋を危い足取りで渡っているの一寸とも違くない1日1日であり、一足ふみはずせば急な底知れぬ流れに吸込まれてしまうであろうに、母校の諸先生方の常に変らぬ御指導をいただき今日までどうにか歩んで来ることが出来ましたことを紙上より厚く御礼申し上げます。

現在、どこまでその一本橋を渡り、これから先いつまで渡りつづけなければならぬであろうか。そのところを知らないが、行先には必ずや苦しみと恵みあるものと思いつつ今日も1日を元気に頑張っているのです。その日その日の教材に追われ、家庭管理学においては時間配分が云々等と講義しながらも先生1年生は全く実行がともなわず今日も又、これから大学祭の準備、調理実習、食物と本の頁をめくらねばなりません。いわゆる雑用が一人前に多いのにはこれまた困惑のスケールを拡大するのみです。

今日は、勤務生活の中から感じたものを寸暇に紙上にまとめてみましたが、これが皆様方の将来において何等かの型においてプラスされるものであれば幸いと存じます。最後に皆様方の御奮斗を祈りつつペンをおきます。（1958. 11. 5. 教室にて記す）